

みおやの老

教祖の巻

みおやの実在	一
佛子の自覚	七
光明	一七
光明生活	二一
彌陀の分身なる教祖	二二
彌陀の心光に満たされたる教祖	二三
宮中の太子と光明中の釋尊	二五
我等が師なる教のみおや	二九
身心の靈化	三〇
教祖の精練	三一
光明生活の階級	三三
諸根悅豫	三五
姿色清淨	三七
光顔巍巍	四一

みおやの實在

宗教心即ち信仰を立んには先づ第一に私共を救靈ひ給ふ大慈父即ち一の大御親の實在を信じて之に歸命信賴する處に宗教心は成立するものである。更に云はゞ宇宙には一切衆生を悉く我が子として平等の慈悲を以て無條件に救ひなされる大みおやの在すことを確信するのである。教祖釋尊の此世に出で給ひしも唯一のみおやの實在を教へ、すべての衆生をして、我は佛子なりとの自覺を與へみおやの空き如くに空き人格と爲さんがため教化を垂れ給ふたのである。

我が教祖釋尊は、人類と等しく人の身を以て世に出給へども其の御本體は法身無量壽如來にまします故に、法華經に「三界は皆我が有なり、其中の衆生は悉く我が子なり」と仰られしは、暫く人間の身を受給へども其の御本體は法身無量壽佛に在す故に、久遠劫より在ます處の大みおやであるが故に、一切衆生悉く我子なりと宣たま

ふたのである。

佛教は哲學で居ると共に宗教である。宗教的に所謂大みおやを、哲學的には眞如とか法性とか又は第一義諦等の名を以て呼んで居る。宗教的に云はゞ、宇宙全一に活ける尊ときみおやなれば法身又は如來と云ふ。我等實に活ける宗教心を以て觀る時は宇宙に絶對的に尊き實在を唯一の大御親と信せざるを得ぬ。みおやは絶對的に大にして唯一體に在ますけれども、三身を以て我等衆生の爲に、大みおやの働きを現し給ふ。今暫く三身の義を略説せん、三身とは法身と報身と應身とである。從來の佛教家は三身を説明するに哲學的方面のみに解釋して居るものが多いやうである。今吾人は宗教的信仰を以て三身を説明せん。故に説明の方法が自づと變つて居る。一、法身は又毘盧遮那と云ふ、徧一切處の義にて宇宙全體に亘つて是れ活ける絶對人格と云ふ意味である。法身を哲學的に解する人は理法身、智法身等と云つて法身とは單に一の理であると思つて居る。彼等には宗教的に云ふ絶對人格の永恆に活ける大みおやを觀ることは出來ぬ。密家には宗教的なる宇宙全體に亘れる地水火風空の物質と識大の心質とは元一體兩面なので、宇宙は絶對的に活ける法身佛と仰いで居る。楞嚴經は純宗教的ではないが、宇宙を構造する地水火風空識大も又外界の色聲香味觸も人の眼耳鼻舌身の識も種々様々の働きを表して居るけれども其の大本は如來藏妙眞如性と云ふ宇宙絶對の一大なる心靈であると説いて居る。若し夫を宗教的に云はゞ宇宙全體の絶對人格と云ふことになる。けれども彼は汎神論であるから大御親と子との區別を立てて居らぬから宗教としては物足らぬ感じがする。佛教の哲學的方面としては巧妙なるも宗教としては有難くない説が多い。我等は楞嚴經に云ふ絶對心靈を其ま、絶對人格として、而も最も尊とき一りの大御親と仰ぎたい、否、尊く仰がざるを得ぬのである。又佛教の汎神論的に我は是れ佛なりと云ふ説も宗教としては有難くない。矢張り來は絶對人格即ち宇宙の大みおやにして我等は其の子なので、大御親より稟たる佛性を具有して居ると共に世界の因縁から受けたる人の子たる罪惡の根本煩惱と云ふ悪い

素質をも併せ持て居る。大みおやより稟たる佛性は自分の力で之を開きて圓滿なる徳を顯すことは出来ぬ。又自己の煩惱の悪質を自分で解脱して完全なる道徳と靈化することも出来ぬ。佛性を開發し煩惱を靈化して圓滿なる人格とならんには報身無量光如來の光明を仰がねばならぬと信ず。故に宗教は報身佛が最も尊いので宗教の中心本尊は報身佛である。

二、報身佛は梵に盧遮那と云ふ。宗教としては是が中心本尊である。之に淨滿と光明遍照との二義あり。宇宙最高の處に在して金銀瑠璃寶石等の種々の寶を以て莊嚴せる清淨と安樂と自在と常住の永しへに光明輝く處に最も麗しき相好圓滿の尊容を以て光明常に照し無量の菩薩聖衆の爲に恭敬し圍繞せらる。十方一切の聖者は歸する處此に到るのである。是の人格的最高位に在ます尊體こそ報身如來である。又、一方には智慧と慈悲との光明遍照十方世界を照して、而して信念する處の衆生を光明の中に攝めて其心を清め復活せしむ。報身佛は絶対的精神界の太陽である。自然界の太陽は此の肉體の世界を照して一切の生物を生育し活動せしむ。報身如來の光明は人の精神界を照して靈性を復活せしめ給ふ。人の肉體が太陽の光りを離れて生育することが出来ぬ如く我等が靈は如來の智慧と慈悲との光明に照されざれば進化し向上することは出来ぬのである。喩へば我等が法身から受けた靈性は鶏の卵のやうなものである。報身の慈光に攝取せられて初めて卵が鶏に孵化するやうに我等が清き靈性が活き復るのである。乃で初めて活きた信仰となりて光明の中に清き生活をする事が出来る。人は此所に至つて初めて大みおやと親子の親しみができ、永遠の生命となるのである。而して此の肉體の命盡くる時は正しく大みおやの光榮と幸福との光明輝く御許に還りて永恆にみおやと幸福を共にするのである。故に縱令人と生れてもみおやの恩寵を被むらざれば卵子の腐敗する如くに永く神識は闇黒の中に墮落して仕舞はなければならぬ。今此の雜誌を發刊するのも實はみおやの光明を世の同胞衆に頒たが爲である。斯く大なる御親の光明は永しへに照しつゝあるも若し人佛釋

四

五

迦尊が此土に出現して教を垂れ給はずば我等は報身如來の光明を受けることは出来ぬのであつた。されば應身教祖の御恩徳を深く感謝せねばなりません。

三、應身佛とは釋迦如來のことである。假に人間の身を以て此世に御出ましなされて衆生に救の道を教へなされたみおやである。釋尊はもと御神識は報身彌陀如來から身を分けて此世へ御出ましなされたのである。中天竺は摩訶陀國に生れ、御父は淨飯大王にて御母は摩耶夫人と申上げ、幼名を悉達太子と號け智解絶倫にして凡ての學藝を習ふに與妙を究めずと云ふことなし。尊きこと天子たり富四海を保つ。人間として此上もなき果報の御身分なるにも係らず、老病死を見て世の無常を悟り、國と位とを棄て、山に入り、道を學び勤苦六年の修行を経て、終に摩訶陀國の菩提道場に於て一夜天魔の妨害を降伏し、十二月八日の曉に罪惡の根を斷ち無明の闇を破り朗かに無上正覺を取り給ふた。宗教的に謂はゞ是までは人間の子として生れた罪の身であつたが彌陀の光明を被むりて精神が生まれ更り、光明中の人と爲り給ふたのである。夫より五十年の間は専ら暗に迷へる衆生を教へ導きて光明の大道に入らしめられ、竟に八十の御年狗屍那國跋提河の邊りにて入滅遊ばした。御身は茶毘一片の煙りと消給へども御靈神は本の淨き御國なる無量壽國に御遊ばしたのである。釋尊の御生涯は唯凡ての人々を闇黒の裡より光明の生活に誘引されたのである。斯く三身に分れて在すと雖も元は一體である。法身としては天地萬物の本體にして一切衆生を生み且つ活して下さる御働きにて、報身佛は私共の法身から受けたる靈性を開發し又煩惱を靈化する爲に智慧と慈悲との光明を以て念する衆生を攝化し給ひ、應身としては人間世界に御出ましになつて人類にみおやの聖意を教へ給ふのである。故に歸する處は一體の三面に過ぬのである。

六

佛子の自覺

如來は吾等衆生の本覺の大みおやで在ますことを信じられた時には、随つて吾等は

眞に之れ佛の子であると云ふ自覺が生ずる譯である。併し唯佛典に一切衆生は悉く佛性を有すとの文を讀んだばかりでは佛子の自覺とは云へぬ。全く精神の奥底に伏在せる靈性がみおやの光明に喚發されて、恰も鶏の卵子が謂ゆる啜啄同時に殻の中より開裂して雛子と現れた時に初めて我は佛子であるとの自覺が生ずる。我等は佛の子であると同時に人の子である。有ゆる罪惡の種子を悉く持て居る、動物性の煩惱を皆持て居る。我等の動物性は犬や馬の如くに唯本能的に素材に正直に犬は犬、馬は馬としての本能とは違つて、我等は知識が發達して居る丈に非常に狡猾なる最も兇惡なる行爲を爲す處の動物である。之を儒教には人欲の性と云つて居る。此の人欲の性と云ふものは實に自分勝手なもので、各自が自分の口々に起り來る心の云何を返照したならば、如何に自分びいきの目で視ても到底善良のものとは思はれますまい。人間は悪い方へ發達して居る丈また善い方へも働かすれば如何なる善事も爲し得るのである。是人の子たる動物性を有して居ると同時に法身より受け得た佛性即ち靈性をも併せ持つて居るからである。併しながら倫理の講義を聞いた位では心の奥底に伏在して居る靈性は開發すべきものではない。眞にみおやをみおやと信じて、みおやの靈光に觸れ靈力に同化することに依つて初めて佛子の自覺も出來、靈性の開發もなし得らるゝのである。寔に佛陀出世の本懷もこゝにあるのである。然らば我等は如何にして此の自覺に入る事が出來るかとなれば是に就て二方面から親と子の道がつくと思ふ。一面は聖道的即ち法華經に如來は一大事因縁を以ての故に世に出現し給ふ。其の一大事因縁とは即ち人々本具の佛知見を開きて佛の正道に入りしむることである。換言すれば各自の奥底にある佛性を聞き佛子の自覺を興へんが爲に世に出現せられたと云ふ。又、梵網經には人の佛性を聞き佛子の性徳を働かせんには佛の憲法に基きて、父の家督を相續させんとするの聖意にて説き明されてある。經に衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る。位大覺に同うし已りぬれば眞に是れ諸佛の子なりと。茲には全く父の憲法に基つけば家督を相續させると云ふ意味である。前の兩法共に道理の上には子

として父の相續は出來易いやうなれども、動もすれば唯、理論の上にも我は佛子なり否、我既に佛なりと、いかにも自覺に達したる如くに云ふけれども事實は却々許し難い。故に一方の宗教的方面よりすれば、事實の上に還つて入り易い。其は如來は慈悲深き母としての恩寵を以て子たる吾々の靈性を養育して頂くと云ふ意味を以て親子の自覺に入るからである。又、云何にして慈母の恩寵を被むるか云へば如來は慈悲のみおやと聞き、みおやは我等衆生の迷子を慈み南無阿彌陀佛と我が名を呼び我れを頼めと恰も初めて産れし兒が未だ母の面だに見ることは出來ぬけれども、唯啼く聲を便りに乳房を咄ましむるやうに我等が未だ如來の慈悲の温顔は見えぬけれども、只々みおやの慕しさに一向御名を呼ぶ時は漸々に信心增長して縱令尊顔を拜むには至らざるも頓てみおやに親みて現に此に在ますことを信ずることを得。經に如來の威神功德を聞いて日夜に稱念して至心不斷なれば、光明に遭ふことを得て三垢消滅し歡喜踊躍して善心生ずと。また觀經には若し念佛するものは當に知るべし、此人は是れ人中の自蓮華である。觀世音大勢至其の勝友となる。當に佛の位に座すべきなり、故に

かんとなれば如來の御子と生れたからである。此の意は若し眞にみおやを憶念して離れざるものは身は人間にありても其心神は清き佛子である。白蓮華は淤泥の中より出でても其の潔白なること世に比ぶべきものなき如く凡夫の汚き心よりも清き佛子の心が生ずるのである。實に希有である。即ち如來を念ずるが故に能念の心も佛となる。世に是程聖き靈なる人はない。されば心の聖き聖者觀世音大勢至共に我が友達として愛し給ふ。已に如來の子と生れたのである故に頓て諸佛と同じく無上正覺を得べしとの意である。然らば御子としての自覺のみでなく其の内容に於て最も親と子との親密なる血が通つて居る。聖善淨は念佛者と如來との間には凡てよりは親密なる愛と最も近き縁と又強き力とを以て固く結んで離れぬ關係を爲して居ると明されてある。斯くの如きの因縁を以て佛子の自覺と共に親子の親密なる愛を以て繋ぐことを得る、内容までも御子となり得られるのである。

光明

一一

この光明は我等衆生の心靈を復活し靈に活かす處のみおやの靈力にて恰も太陽の光に依て我等が肉體の生命の活かざるゝ如く光明とは衆生の信仰に對するみおやの恩寵にて一大靈力とも不可思議功德とも名けらる。如來の光明は眼には見えぬけれど、一心に念佛する時は其光明に觸れ自然と心が一變して苦を抜き樂を興へ惡心を轉じて善心となり迷を除きて悟を得せしむ等の不思議の功德が備はつて居る。喩へば太陽の光りは地球上有ゆる生物の生命より一切のもの悉く其光りを被らずして活けることは出来ぬ。地上の萬物が太陽の力を離れては凡ての働きを失ふが如く人の精神は大みおやより受けたる不思議の靈能を有て居るもの、更にみおやの恩寵を被りて聖意に契ふやうに働きて人生の天分を全うし使命を果すことを得るは如來の光明を享くるが故である。故にみおやの光明は實に無量無邊の種々の方面に亘りて照す徳用である。要を取て云はゞ一切の諸佛聖賢の有ゆる心の働きはみおやの光明に照さるるに依る。恰も萬物が太陽の光に依るが如し。種々の方面に亘れる光明を詳かに十二光に依て説明せば明かに其の不可思議の徳あることが信知されるのである。其は追々に説くことにして今は如來の光明と太陽の光りとに比例して三方面より光明の作用を説明したいと思ふ。通じて太陽の光と云ふとも物理學には光線と熱線と化學線との三つの能力に分ける如く如來の光明も其に例して三種に分けて智慧と慈悲と威神とを以て其作用を説明せん。一、智慧光を太陽の明線に比すれば太陽の明線は肉眼に見ゆる山河大地一切の動物植物に至るまで明かに見する如く、如來の智慧光は一切衆生の智力を照らして萬物の眞理を明かに知らせる作用、萬物には何一つとして理の具はらぬはない。けれども人智慧がないから解らぬのである。有爲無爲と申して有爲とは此の世間の理科學にて研究して居る物理や生理植物杯の凡ての理を明かに知るを有爲の智と佛教では名けて居る。佛教で云ふ諸佛菩薩等の理想界の玄深の眞理を悟る

一一

を無爲智と名く。有爲無爲一切の眞理を照すのが智慧光なれども今は宗教の必要なる我等が信仰上の眞理を覺らして下さる方を主とす。一心に念佛して光明に遇ふ時は縱令學問なき人にも自然と能く佛智に相應する智慧が開かれて正見となり、世間門には善惡因果の理を信じ、進んでは佛智不思議の理に於て疑はず、其の信解する處が大悟徹底した人と同一に歸する如く、是みおやの智慧光に照さるゝからである。世間の學問ある人は絶對界の眞理を相對的人間の智識を以て解せんとするから選つて誤謬に陥り易い。正直に一向に知識の教を信じて一心に念佛して如來の光明に自己の靈性が照らされて信心の眼開く時は自然と佛智に相應して甚深の眞理も自ら解せらるるに至る。

一一

光りに照らさるゝ範圍は甚だ廣い。大般若六百卷の如きも智慧光に照されたる眞理の説明に過ぬ。此事は漸次に説明せん。

二、慈悲と太陽の熱線、太陽は明いと共に熱い熱を放つて地上の萬物を暖ため有ゆる生物を活して居る。如來の慈悲は溫暖なる靈力を以て衆生の心靈を溫暖ため活かし居る。慈悲と云ふものは溫暖なる心の作用である。世間には慈悲も同情もなき者を冷酷な人と云ふ。慈悲心とは人の苦を我が苦とし、人に樂を興ふるを己が樂みとなす世に如來程一切の人類に對して最も慈悲の深い御方はない。我等一切衆生に無限の同情を以て苦を抜き樂を興へ給ふのが即ちみおやの慈悲である。春和の溫暖なる氣候を被れば百花爛漫と咲匂ふが如く如來の恩寵に觸るれば衆生信心の花開きて麗しきを呈し芳ばしきを流す。如來の慈悲の存在することは一心に念佛して信心の花開きし人の心に證明せらる。理智では分らぬ。全く光明に浴すれば法悦とて言葉には云はれぬ歡喜と妙樂とに充たされ神聖なる幸福を感ぜらるゝ様になる。之が如來の慈悲を太陽の熱線に例する所以である。

三、威神力と太陽の化學線、太陽には化學線なるものありて地上の凡ての物に化學作用を起して生物を育て、居る。如來の威神力は人の意志の煩惱の惡質を靈化する能

一一

力を有て居る。喩へば澁柿の果も日光に照されて遂に甘くなる如く人間には貪欲瞋
 患愚痴嫉妬等の諸の煩惱の澁を有て居る。是が爲に自ら惱みまた人に憎悪せらる。
 其他種々の氣質または習慣等の悪質を以て人間の心と氣を固めて居る。之れが抑も人
 間の弱點である。然し此の悪質があるから如來の恩寵を仰ぐ必要も感ずるのである。
 凭る人間の苦味も滋味も如來の光明に遇ふ時は何時か心の滋味が脱けて最も貴すべ
 き甘味と變はる。悪にも強きは善にも強く煩惱が菩提となりて人格も一變して聖き人
 となる。如來光明中にありて聖意を己が心とし清き正しき生活がなし得られる様に
 なる。是又、理窟でなく一心に念佛して光明に接する時は惡を廢して善に進み邪を
 捨て正に歸し、人生を價値ある光榮ある人とはなし給ふ。
 願はくば諸士よ大みおやの光明は天地に充滿す。一心に念佛して靈光に接せよ、
 初めて人生の眞意義を覺ることを得ん。

光明生活

教祖釋尊が此世に御出ましなされた聖意は、一切衆生みおやの光を識らず無明の闇
 に彷徨ふて何れより生じ何れに歸趣すべきやを識らず、盲目的に生活して居るは實に
 憐愍の極みである。斯る衆生をして如來の實在を識らしめ秩序あり意義ある有終の美
 ある光明生活に導かん爲めである。然るに世間五惡五痛五燒の朦冥の衆生を教化し
 て五惡を捨て五痛を去り五燒を離れしめて正と善との光明生活に復活せしむるには
 實に容易のことでないけれども、世尊は懇に衆生に五惡五痛の人生の暗黒面を認め
 させ飽まで永遠の光明に導き給ふことに奮闘努力されたのである。
 精神生活に二類あり、一類の衆生はみおやの光明に遇はず、人生を暗黒の裡に葬
 り去るものは實に凭る族は人間として罪惡のみでなく天心に逆ひ人道に反る朦冥抵突
 にして難化の類である。彼等は肉欲我欲の奴隸として精神が現在より永遠の苦境に墮

落する族である。經に「惡人は惡を行じて苦より苦に入り冥きより冥きに入る」とは
 此類である。又、一面教祖の教に基づきみおやの光明に活きる者は常にみおやと共
 にありて聖意を我が意とし、意義あり價値ある生活をなし、今日一日の勤めは永遠の
 基礎となることを信じ、永へに希望の光りは前途に輝き現在を通じて永遠の樂土に安
 住する者である。此等は失敗の内にも成功の秘密を發見し、苦境の究りに樂土を見出
 し、艱難に遇はる己を研ぐの砥石と意得困苦に對しては人格を鍛鍊するの器となす。
 凭の如き光明の前には一切の事業として悉く佛道ならざるはない。經に「善人は善
 を行して樂より樂に入り明るきより明るきに入る」とは斯る生活の類を云ふ。是れ人
 生が永く光明と暗黒との何れかに岐るゝ分岐點である。

教祖は凡ての人間が染汚と苦惱と無知と罪惡とに覆はれて堅く業に結び付けられあ
 るを感れみ、斯る輩を救済せんには獨みおやの慈悲の光りに温められて救はるゝ外に
 道なきを覺り給ひ、壽經に懇に斯る罪惡の凡夫をしてみおやの光明に依つて心靈
 復活して光明の生活に入るは無上の光榮なることを御示しになつた。

無量壽經は教祖釋尊が大宗教育家とし宗教の眞面目を顯示されし經典である。然れば
 此經を説かんとする會上に於て先づ釋尊自ら彌陀の光明に充滿されたる身心の相
 を現して光明生活の模範を示しなされた。暫く經の文を以て彌陀の光明に充され
 たる教祖の相状を明さん。爾時に世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり、時に
 弟子の阿難尊者が此の靈相を瞻て長跪合掌して御問申上た。今日世尊の諸根悅豫し姿
 色清淨にして光顏巍巍たること明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如し、威容顯曜に
 して超絶し給ふこと無量なり未だ曾て殊妙なること今の如くなるを觀上らざりきして。
 教祖が此經を説かんとして序分に此の相状を現はしなされたのは深き意義あり。其
 の所以は是より説示する教に依りて彌陀の光明を被りて心靈復活する時は心が彌
 陀の慈悲に充され靈妙なる感應に依り身心全體が彌陀の靈德に充さるゝ故に眼根耳根
 より乃至身の全體が彌陀の靈德の容物となり、法喜と禪悅に盈ち溢れて内部に充さる

る悦豫の相と現はるゝのである。また彌陀の光明に反映したる徳が姿色清淨の相と現はる。彌陀の威神力が精神統一の力となつて引き締まつて来るから光顔巍巍と現れ威嚴が備はる。之が教祖世尊が我等衆生みおやの光明を被れば器の大小に係らず其の分相應に被りたる光明を以て生活々動の上に現すことが出来るとの人格的模範を示しなされたのである。

尙更に教祖は御心に彌陀の靈徳に充されたる内容の状態をば五徳を以て表示されてある。光明生活の事に付ては號を追て述ることゝし此に省略します。

初佛經に曰く
十方佛刹中の衆生菩薩等あらゆる法報應身及び變化身皆無量壽極樂界中より出づ。
往生論註に曰く
諸佛菩薩に二種の法身あり、一者法性法身二者方便法身なり。法性法身に出て方便法身を生じ方便法身に出て亦法性法身を出す。此の二種の法身は異にして分つべからず。一にして同すべからず。是の故に廣略相入統るに法の名を以てす。菩薩若し廣略相入を知らざれば則ち自利々他する能はず

我等が師なる教のみおや

彌陀の分身なる教祖

謹んで一大事因縁經の意を案するに我等が教祖釋尊の御本體は清き上界に在す所の法身無量壽佛である。上界に在ては彌陀光王、地上に分身しては釋迦牟尼佛、彌陀尊は宇宙最高の中心に在まして光明普ねく十方世界を照します大日輪である。喩ば太陽は自分より分出したる地球に對して永恒に光明を與へて萬物を長養するが如く淨界の彌陀尊は御自身より地上に分身したる釋尊に常に光明を注ぎて清く人格を光として地上の一切衆生を教化し給ふ。若し淨界に彌陀なかりせば地上に釋尊てふ人格の光明者出づべきなく釋迦は人格を以て彌陀の光明を現し給ふ聖者なるべし。若し釋迦尊の光明的人格を以て彌陀を現すにあらざれば此の地上の衆生に淨界の大光明尊

の在ますことを證明せしむることが出来ぬ。
釋尊が地上に出で給ふ所以は偏にみおやの實在を示し其の大光明の下に一切を攝取して永遠の光明に活かしむるためである。我等衆生は元、法身のみおやより受たる靈性を有て居るけれども攝取のみおやの光明に觸れざれば靈に復活すること能はず。若し人彌陀の光明を被むる時は從來の人の子としての無明罪惡より靈に復活して光明中の人となることを得る。

教祖釋尊は大哲人であると共に大宗教育家である。大哲人としての釋尊は聖道門の教主である。今此の壽經は釋尊が大宗教育家として我等衆生の爲に自ら信仰の模範を示しすべてを勸めて彌陀の光明を被むりて靈に活すべき眞理を教へ給ふ。今我等が師なる教のみおやと云ふ題に就て世尊が我等衆生の爲に身と心と共にみおやの光明に活き働すべき信仰の模範を示し給ふことを明さんに、大經の序分の三相(身)五徳(心)の文を以てす。實に此の三相五徳は光明生活の身と心とに具ふべき靈徳である。若し我等如來の光明に依て此の靈徳備はらざれば、自己の染汚と罪惡とを以て人生を徒にして永く闇黒の獄火に燒かるゝの外道なきものを、何の幸ぞや釋尊の教に依りみおやの光明に遇ふことを得たる。彌陀釋迦二尊の恩徳を深く感謝して粉骨碎身以て報謝せざるを得ぬ。

彌陀の心光に滿されたる教祖

我等が教祖釋尊は彌陀の光明に滿たされ又如來の聖意に活き働きなされた尊體にて何人にも如來の光明に滿さるれば大小はあれども、凭やうな人格と爲り得らるゝとの模範を吾等衆生に御示しなされた。吾人は壽經の序分に釋尊が自ら彌陀の光明を得給ひ、彌陀の聖意を御意と爲させられ、身に其相を現はしなされたことを演たと思ふ。
譬へば西に日は入るも 光りは月に映る如と

彌陀光王の日光は 牟尼満月に輝けり

二四

此頌の意は彌陀の光明受けたる釋尊の御相を演べたのである。例へば中秋の清宵に東天に皎々と昇りたる満月の冴て輝くのは其光りの本は此の地球からは見えぬ西に入りたる日の光りが月に映るので、夫で清らかに照して居るのである。夫れの如くに釋尊の御相の如何にも清く麗しきは神人の徳を以て日月の光りさへも隠蔽する程の立派な御人格として現れたるもの、其源は凡夫の肉眼では視ることの出来ぬ上界に在して威神と慈悲との光明にて圓かに照し給ふ彌陀如來の御徳の光明が釋尊に映寫して凭の如くに威神無極の人格と現れ給ふたのである。宗教の眞髓中心はこゝに最も意義あることにて若し人彌陀の光明に靈化せらるゝ時は其分に應じて光明の喚發する人格となり得らる。故に何人も此の光明に依て復活せよ、是れ釋尊が世に出し衆生教化の本懐はこゝにある。釋尊が淨界の彌陀の日光に映寫したる六根清らかに光顔麗しき御相と現れ給ひ、御胸の内容は彌陀の慈悲に盈滿せられ威神に靈化せられて神人の活動を爲され給ふと。御相の上に諸根悦豫、姿色清淨、光顔麗々たる三通りの御相は全く上界の彌陀の光明の映寫したので、太陽の光りに反映したる満月の如くである。釋尊は初めて正覺を成じてより永しへに彌陀の日光に盈滿せる御人格である。釋尊が幼時悉多太子として王宮に在ませし時人生問題の爲に深く憂惱し煩悶なされてありし時と後に正覺を成じて彌陀の光明に充され六根常に悦豫し光顔永へに麗しく在ますやうに爲りての精神生活を比較せば、いかに彌陀の光明は人の精神に對して偉大なる靈力を與ふるかは自ら知らるゝであらう。

宮中の太子と光明中の釋尊

今此の聖經に現れたる釋尊の御相を窺ひ奉れば御身は娑婆に在りながら神は清き光明中に在ること明かである。斯の如きの世尊も未だ彌陀の光明を得ず王宮にありて太子たりし時、生死問題の爲に非常に煩悶し深く出家の志しを起し給ふ、父王の

二五

思ふに太子出家の志を奪ふは只太子をして世の快樂を興ふるの外なしとなし王は太子の爲に有ゆる娛樂を興へんが爲め或は三時殿を建て四時の快樂に飽かしめんとし又國中より有ゆる美姫を選び采女として常に侍せしめ歌舞管絃を以て太子を眩暈せしめんとし、一國の富と力とを竭して太子の志を奪ひ出家の望を止めんとされた。又太子十七歳の時善覺王の女耶輸多羅を聘して妃と爲し又、美姫共の歌舞管絃は長夜の宴を殿内に演奏せり、實に天上の樂士を地上に移して太子の志を奪はんとす。如何なる色味の快樂も太子の人生問題の煩悶は取除くこと出来ぬ。凡夫の最も光榮とする物質上の幸福を以ては太子の心靈上の望を満足せしむることは出来なかつた。深窓に在りましていかなる娛樂も亦樂しみとは思はれぬ、如何なる美味も甘いとは思召さぬ。只生死のために心を煩はし神を惱め憂慮措くことが出来ぬ。視給へ普通の人の幸福は太子の爲には何の價値もない。然して凭の如きの太子が一度家を出で道を修め遂に六年の後に正覺を成じて即ち彌陀光明中の人と成り給ふて後は上界の彌陀と地上の釋尊との融合せる御心情、我れ彌陀に入り彌陀我に入りて彌陀の靈光に融合したる釋尊の心は恰も明かに研きたる明鏡に日光が反映せし如く、彌陀の光明に復活したる釋尊の精神は昔太子の時とは一變し最も麗しき圓滿なる光輝ある人格となり給ふた。釋尊の御心は彌陀の大慈悲に滿され有ゆる妙樂中の最妙樂なる自受法樂を受け給ふ。其の彌陀の靈に滿されたる所に六根は悦豫に滿ち自から姿色清らかに光顔麗々とした相を現された。

二六

偕て釋尊の靈妙の法樂靈感極まりなく、歡天喜地、八面玲瓏全く彌陀の光明の反映とはいかにして知ることを得たかとなれば、經に明されてある世尊は彌陀に充されたる御胸と御相とに現はれ又其の内容の相を世の人々に知らしめて而して世の人々にも彌陀の光明を求めて眞の靈福を得べきやうに志を起さしめん爲に御弟子の阿難尊者に出で釋尊の御相に麗しきの現はれたるに深き思召あることを云はしめて阿難が世尊に申上た。あ、世尊よ今日世尊を見上げ奉れば御眼や御耳を初め全體に亘りて御

二七

悦びに満され御姿色の玲瓏として清淨皎潔にして又み顔の威嚴は巍くいかにも麗しく清らかに威相の嚴めしきは實に明淨なる鏡の光りが表裏に透明する如くに在ますは是には我曹の窺ひ知ることの出来ぬ因縁の存在することゝ存じます。(こゝが即ち釋尊の念佛三昧にて能く精練したる鏡に彌陀の靈徳が映寫したる爲に現はれた御相に在ます)

世尊の聖意は彌陀の大日光はいかなる處にも照りわたりてあれば何人にも斯の光の映寫すべきやうに自己の信心の鋭さへ能く磨けば其處に映りて六根麗はしく光顔の相を現すやうに成り得らるゝ故に(とし。)

此れについて思ふべきことは釋尊昔王宮に在て有ゆる物質上の幸福の中にして毫も満足を得ず、還つて人生問題の爲に憂愁煩悶に耐へずして神色憔悴し給ひし反對に假令御身は乞鉢の道人たるも彌陀の光明に充されたる御相は姿色麗しく光顔巍々の威相となり給ふ。こゝが人の精神に信仰の光明ありと否とに依て分るゝ所以である。

我等が師なる教のみおや

人間は宗教的の働きを爲す器である。工業場にて電気や蒸氣にて運轉する機關や機械のやうに我等は如來の不可思議なる靈力に依て動かさるゝ器械である。吾人が如來の靈力にて愉快に運轉するやうに爲らんには例へば工業場の器械が巧妙に出来て缺點故障なく又之を操縦する技師が能く業に精練したる靈腕を揮つて器械を操縦する時は毫も滯滞なく快轉する。然る時は仕事の秩序も順調に技師も亦其業に興味を感じ身も心も其の仕事の中に没頭して遂には時間の遷るも忘れ身體の疲勞をも感ぜざるやうになる。

宗教心も我等が此の身も心も凡ては實には彌陀の靈力に運轉せらるゝ器具である。故に全く此の身と心とは、もと法身から受けたので有から身も心も實に巧妙に出来て居る。而して四肢五官及び總ての身體の器械も亦血氣循環や呼吸や發聲機關などの

生理的の調節機關が能く調順にして宜しきを得れば自然に如來の靈的電氣に感じて快轉す。此の身も心も彌陀如來の電氣に依て靈き働きを爲すべき器械たる又機關とである。故に此の如來の器たる身心を精練し、機關の操縦法を能く練修する時は意の如くに快轉し、聖旨に契ふ働きを爲すに應分に自由となる。

教祖は自ら如來の器たる御身心を能く研きて我等のために好模範を御示しなされた。然れば我等の身體各部の五官より筋骨に至るまでいかなる處にても如來の光明に依りて清められ、又恩寵に充たされて自由に快轉するやうにすべきである。縱令精神と志氣とが、いかに猛威なるも身體機關の調練宜しきを得ざれば意の如くに自己の身體を運轉することが出来ぬ、故に此の身體の精練を忽緒にしてはならぬ。

身心の靈化

若し人が信仰に入る時は此の心が如來の光明に靈化せられて麗しく生れ更るばかりでなく此の身體各部も同じく如來の光明に充される時は玲瓏と輝き快く運轉するやうになるべき器なれば必ず調練をしないでならぬ。人は宗教的に使用せらるゝ程度高等なる靈妙なる身心なれば他の動物とは大に異つて居る。動物は馬は馬、牛は牛の本能のまゝで自分の性質のまゝに生きて居つて宜いので調練の必要はない。人は高等に進化した丈に磨かなければならぬ。礦物に例して云はゞ岩石などは人工的に琢磨するの必要はない。天然のまゝにて還て素材なる處に風韻あつて宜いのである。然るに高等なる寶石や水晶杯は人工的に琢磨しなくては其に具有て居る光りが放つやうに爲らぬ。人間は高等に進んだ丈に充分に信心の薰練し即ち能く如來の光明に靈化せられざれば如來の靈力を以て快轉することが出来ぬ。是れ信心の精練を要する所以である。

教祖の精練

釋尊は御生れつき三十二相の備り完全無缺の形體にて在ます。然してなほ身體各部に互りて腦髓神經より筋骨皮肉凡てに於て充分に精練鍛治し給ひて實に彌陀の靈光に充されし靈器に在した。

就て何人も思ふならん。釋尊は精神には實に大悟徹底して不可思議の力を以て如何なる惡魔外道をも降伏し給ふならんも、御身體は本玉宮にありて數多の侍女にかしづかれたる玉體なれば體力としては逆も寒熱等の自然の刺激に對しては抵抗する程の皮膚筋力等は持ち給はざりしならん。否らず佛陀は玉宮を出て山に入ての苦行は、いかなるものも及ばざる體練の行を取行なされたる結果として風雨寒熱にも亦いかなる事も能く耐得らるゝ體力を有し給ふた。

然らば今念佛者が佛祖の如くに光明中の人となりて如來の靈力を現すべき器たる身心とならんには、山に入りて修行せねばならぬ哉と云ふに然らず、只佛祖は斯の光明を發見せんが爲に長年を要して御修行なされた。なれども我等は現に智愚賢不肖の別なく只、佛祖の教を信仰し一心に念佛して至心不斷にして而して念々彌陀の光明を攝取せらるゝことを信じて心々相續して止まざれば聲も呼吸も悉く光明に靈化せられ靈光に薰染して四百兆の細胞迄も悉く光明中のものとなる。身も心も悉く是れ如來の有である。此の四支五官凡ての機體も乃至全身を循環する血液も呼吸の息も凡ての分泌物までも彌陀の靈光に溶して此の器械が愉快に運轉するやうに成り得らる。若し全く如來の聖意を會得して我は如來の子である、親と子との間に温き血は通つて居る。佛祖は我等に此の身も心も彌陀のものとして獻けて使ふべき御模範を示しなされた。

光明生活の階級

天に在ましては彌陀 地上に出ては釋迦、大小異ると雖 同體の異方現に在す、大宗家としての釋尊は彌陀の光明を人格的に現じなされて一切の衆生に模範を示し

なされた。我等は之れに則りて光明獲得せんが爲に一心に念佛する時は頓て光明の人となり得らる。若し然らば其光明を獲得し光明の生活と爲らんには初心より直に圓滿にして佛祖の如くに成得ざるものなるか、將た階級的に進歩するものなるかと問はゞ斯の信仰の生活には階級なくてはならぬ。其の光明獲得の順序は恰も月の盈缺の如くに喩らるゝ。現世界に於て全く圓滿なる佛陀のみ満月にて文珠彌勒等は十四日の夜の月、各宗の祖師の如きは十二三夜の月にて初めて信仰の光明を獲得した人は、初めて現れたる三日月の如くである。又毫も光明獲得せざる人は晦日に喩らる。又縦令念佛すと雖も光明獲得せざるものは黒月に喩ふべきである。又いかに佛教を廣く學び辨才無碍なるも如來の光明獲得せざる人は、人生が闇路を辿つて居る盲目生活である。

何人も人と生れたる上は如來の光明を得て生を覺醒すべきである。而して光明の中に向上の一路を辿りて歩々に進むこと月の纖月より一夜々々に満月に進むやうに、信仰の生活に入るべきものも初めて如來の子たるを自覺する時の人生が價値ある意義ある生活に入りたるのである。佛祖釋尊の教化の目的は總ての人々をして斯の光明を獲得して光明の生活に入るべき眞理を教へ給ふのである。

諸根悅豫

諸根悅豫、先に演た如く釋尊の諸根(眼耳鼻舌身)凡ての機能が能く調順して、凡ての機體が完全無缺なるのみでなく、御身體中の各部が能く訓練し、實に彌陀の靈徳を安置すべき理權にて在ます。釋尊は自ら五根等の凡ての生理機能を能く調伏して在ませば、動轉躁の舉動等は毫も爲し給はず。去れば釋尊の行住坐臥にも威儀尊嚴にして六根寂靜に在まして、いかにも端嚴なる靈儀を瞻む時は何人も眞に畏敬感服せざるものはない。然れば世尊が成道し給ひて後、牟枝隣陀龍王の池に向ひ給ふ道に於て一の道士に遇なされた、優婆伽と云ふ。世尊の相好及び六根の寂靜に在まして、威

儀端嚴なるを瞻て、奇特の想を爲し煩して云く、世間諸の衆生は皆三毒の爲に縛せらる。故に諸根輕躁にして外境に馳蕩す。然るに今仁者を見上まつるに諸根極めて寂靜なり、必ず解脫地に到り給ふこと決定して疑なし。仁者其姓は何等と。是釋尊の諸根が寂靜にして威儀の最と尊嚴き方面である。

斯の如きの形式の中に最も豊富なる靈妙なる暖和なる快活なる内容は、即ち如來の慈悲の光明の充實である。此の内容の最も圓滿なるは彌陀三昧の實質である。大自在の四徳莊嚴と自受法樂に滿ち給ふ釋尊の身體諸根の凡てに互り能く調ひ、澄清神鑒なる明鏡の影の表裏に暢る如くに、彌陀の三昧重々無盡不可説の内容の歡喜妙樂の靈感が悦びに滿されてある故に神は蓮華藏世界に安住し給ふ、無盡の法樂を受けて在ます。故に凡夫の心が常に五塵の境見るにつけ、聞につけて、心が馳蕩して輕躁動轉し妄想の波浪止まざれば靈境現じ難きが如きと同じからず。

我等が生れたまの五根及び凡てがゆつくりと沈靜して居らぬのは、只目や耳の色や聲にのみ心が奪はれて、其の内面にじつと心を落ち着けない爲である。然るに我等は教祖の御教に本づき凡てを如來に獻げて其の温かなる如來の慈悲の懷に入る時は何時しか其の光明に融合して身も心も總てが第一に我と云ふものが如來の中に融け合ふて、無我の本體となり如來中の我となつて始めて諸根悅豫の心理状態となる。

姿色清淨

教祖釋尊の金色の上に御血色のいと清らかに在しは血液循環や呼吸及び發聲等の神經及び分泌液等の調節作用が能く訓練し節の宜しきを得給へばなり。故に内生的生活も調節が適和する。故に其が表現して姿色清淨皎潔である。

抑も血色及び氣色を能く調へんには、氣海丹田に氣を養ひ靈氣に滿ち邪氣去り神氣玲瓏玉の如くなるべきである。即ち佛陀の金色の靈色が常に身體を養ひ血液の循環順調にして四大常に輕安に金色の靈色は外塵の爲に酸化して錆を生ぜず、宇宙の最靈

英氣たる彌陀の心光に養はれて在ます釋尊の御容色の金色なるは何故なるか。黄金と云ふものは外氣の爲に酸化して錆を生ずることなく何時も變色せぬものである。釋尊の御精神の内容の本質が純粹眞靈にして彌陀の慈悲に充されつ、在すのは、凡夫の心が煩惱を以て胸に充ち外塵の目に色を視耳に聲を聞き杯の眼の欲、耳の欲等の爲にひかれて外境の爲に染汚されて、凡夫の心は恰も鐵類其他の金屬のやうに錆を生じて變色するものと同一でない。即ち外から惡口罵詈に遇へば忽ち憤怒して色に現れ、又紅顏粉黛の麗しきに値へば惑ひ易く、内に貪瞋の念が生ずれば忽ち其の喜怒哀樂が外容に現はる。或は憤怒胸に充れば忽ち赤鬼の如く赫として焰を燃し、恐怖に打たれば忽ち顔色蒼白として青鬼の如くに變ず、縁に觸れ境に對して内心に起れば即ち容色に變化するが凡夫の常である。

然るに如來の靈應に充されたる教祖は決して然ることはない。何なる境遇にも御胸の内が動せぬ故に御容色にも變化はない。凡夫の喜怒哀樂が忽ちに姿色に現ると釋尊のいかなる境遇にも金色の燦爛たる御容色が清らかにして何時も變じ給はぬのは、御胸の内容が異なる所以である。

世尊或時提婆達多が阿闍世太子と謀りて世尊及び諸弟子等を害せんと欲して、世尊及び諸の弟子を請じて王城に迎へ入れぬ。謀りて五百の大象を醉はしめて之を刺殺せんと爲せしに諸の弟子衆が城に入るや、醉象鼻を鳴して進み牆壁を穿突し樹木を折敗し杯して城内戰慄す。時に五百の羅漢空中に飛び上り難を避けんとした。獨り阿難のみ佛の邊りに在り。醉象頭を擧げて至り前佛の御所に趣む。時に世尊は大悲心をも以て和顏微笑し御口より光りを放ちて五指より五の獅子を現はし同聲に俱に吼ゆ。其聲天地を震動した。醉象地に伏して敢て頭を擧ず。時に阿闍世太子は釋尊の最後いかなる醜態を呈するや之を見んと欲して竊かに隠れて其様子を窺うに、世尊は醉象一同獐狂惡の姿にて向ひ來るも、世尊が威容顯赫にして微笑し給ふ時の麗はしき御相の常にも超て妙に淨さを瞻て其御姿は痛く太子を感動せしめた。爲に深く懺悔し奇異

の思を起して世尊に歸依し奉り、謂らく曾て自ら歸依する處の提婆達多是若しも意に逆ふ時には忽ちに憤怒の色が容貌に現れたりしも、今日世尊を見奉るに斯の如きの危急の場合に臨みて還つて和顏微笑し給ふ如きは實に眞の聖者に在すなり。然らざれば何を茲に到らんと、深く前非を悔いて初めて佛世尊に歸依し奉れりと。

又世尊が祇園寺に於て國王及び大臣等の爲に說法し給ふ折、外道等が佛陀に對する歸依を壞らんが爲に旃荼彌と云ふ妖婦に盆を繋ぎし腹を大きくして百千の坐を分けて世尊の說法し給ふ高座の側に立て誘て曰く、沙門よ我が夫よ君何ぞ自ら家事を顧ずして還て他人の爲に說法し給ふぞ。君獨り自ら樂みて我が苦を思はざるや。曾て我と通じて我を娠ましめ、今當に臨月に近附けり酥油を求めて小兒を養ふ爲に我に資金を給せよと。衆悉く驚異の眼を注ぎて之を視る。時に帝釋天は護法の爲に化して一の鼠となりて其の衣裡に入りて盆の繋を噛み切れば忽ち盆は地に落つ。時に於て世尊は毫も驚き給はず、和顏應しく光容巍々として敢て怒り給はず。實にいかなる境遇にも姿色不變にして光顏異なることなく、時に集會皆外道等の中傷的譏諷の憎むべきを責むれば、外道等還つて自ら赧顏慚愧に耐ずして其座を起てりと。

又、舍衛國の流離王兵を起して釋尊の一族を伐つ。世尊の一族成く亡さるゝ時に阿難等の釋種の弟子達は非常に悲嘆すれども世尊は毫も嘆き給はず光顏異なることなし。阿難佛に白して曰さく、世尊よ釋種の危難に罹るに何を悲嘆し給はざりし哉。世尊の曰く、是れ過去世の業因ありて此の報を受く我は曾て此のことを知り、故に今更に嘆かじと。實に世尊は如何なる境遇にも姿色變じ給はず。然れば惡意を以て向へる提婆に對しても羅興羅に對しても常に感情公平にして異なることなし。實に公明正大なる世尊の人格は彌陀の光明に滿されたる御身心なればなり。去れば姿色の上に表はるゝこと斯の如く在ます。

光顏巍々

世尊の光顏巍々として威神極まりなきは、彌陀の威神力と合致したる御意にして能所一體金剛の如く動じ給はざる威神力在すが故である。是れ念佛三昧の釋尊の御意志が彌陀の聖意と合致したる定力の表現である。

世尊の威徳巍々として接する人をして感せしむ。然れば何なる憍慢邪見の人も其の威徳の前には自ら屈服せざるものはない。然れば世尊成道し給ひて初めに阿若憍陳如等の五人の許に詣つて彼等を度せんと言ふに先だち彼等五人共に語るらく悉多太子今は行に疲れ道成せずして我等が所に來らん、若し彼れ此所に至らば我等は昔の如くに敬禮することを爲ざらんと共に約して居りしに、世の諺にも人指せば影さすとか、時に世尊は威儀寂靜として五人の所に至り給ふ。彼等は世尊の威顔に接するや自ら我を忘れて膝を屈し頭を垂れて敬禮せり。釋尊の曰く汝等先きに自ら云はざりしや我等は昔の如くに敬禮せざらんと、然るに今其約に違ふて禮するは如何にと仰ければ彼等は白して言さく、今太子全く眞に道を得給へり。我等は敬禮せざらんと欲せしも君の威神力我等を感せしむ。誠に是れ眞に正眞の道を得給へるが致す所なりと。五人は深く其の威神力に服して竟に弟子とは成りぬ。佛陀は絶對無限の威神光明なる彌陀の靈徳を受く、而して無限の威力より釋尊の身に現じ給ふが故に光顏巍々たるなり。

世の人意馬心猿外境に慳起せられ、内心に喝きて劇しき浪停め難く、之れを統一せんには即ち世尊に倣ひて至心に彌陀を念じて心に彌陀を離れず、一心金剛の如く自ら三昧純熟して純一無雜の思念、無想の境に入らん。如來と合したる時に善を念はす惡を念はず一切の意識超絶し、我滅び如來の威力に滿さるゝ時に自ら威顔巍々たるを得む。

云ふことを休めよ、我等は上根上智の器にあらず、何にして世尊に倣ひて光顏巍々たるを得んと。彌陀の威神力は必ずしも智慧と根機に拘はらず只己を捨て、彌陀を念じ全く至心に念佛する時は必ず三昧成すべし。三昧成すれば彌陀の威力全身に滿つ。

故に光顔巍々と表はるに至らむ。されば教祖の教に随つて三昧を修すべし。

三昧定力功を成せば彌陀の威神力に充され、威力具備するが故に光顔巍々の相を現せむ。

上來説き來る三昧、諸根悦豫は全體に亘りて五官及び一切の生理機體が完全にして能く鍛ひあげてみれば金剛の如くに堅くして其の全體は彌陀の慈悲に充されて靈力を以て働く器械である。姿色清淨は血液の循環や呼吸の氣息、發聲運動等の都ての調節機關が完全にして順調に快轉すべき齋を豐饒にする。

昭和三年七月廿八日印刷
同 三十日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人

印刷人 小林七太郎
東京市小石川區茗荷谷町九八
電話小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水邊端二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番